

【コメント 2】

朴 美貞 PARK Mijeoung

立命館大学客員研究員

韓国人の美的判断基準は、道徳・道徳的行為による傾向があるとする指摘は妥当である。柳の朝鮮美術観——悲哀の美、線の芸術、白の意味——に関して、植民地期より戦後のポストコロニアルに至って様々な立場の韓国人によって、様々な観点で絶えず批判が行われてきた。（韓国人といっても、内国人と、在日コリアンとは、少し立場が違うのではないかと又、批判の際のテーゼ（政治的・社会的背後）が明確に提示されていない点があるのでは？）中でも、「悲哀の美」に重点がおかれたのは、それが、「植民地史観」に起因することとみなされたからである。このようなポストコロニアル的批判（研究・語り）は、美術の分野だけではなく、文学を始め、歴史学・政治・社会・文化などの幅広い領域において行われてきた。しかし、我々はこのような、日韓における「美意識の衝突/まなざしのズレ」を克服していかなければならない時点に立っている。その克服のための先決課題として、植民地期に日本に留学した多くの朝鮮人による、韓国に与えた影響がどのようなものであったかを明らかにしなければならないことと同時に、朝鮮に移住し、新しい日本の建設を夢見たはずの多くの日本人に関する足跡を明らかにすることも重要であると提示する。

Q1：柳宗悦の朝鮮美術観は、初期の‘悲哀の美’論と、後の1920年代の‘無作為の美’論に両分されているという見解の中、後の‘無作為の美’論を仏教美学的境地との繋がりで理解（解釈）するのが妥当なのか？

Q2：柳の朝鮮美術観は、他の研究者とはどのように異なるのか？

Q3：外から見る「柳」に対して、中（内側）からみる「柳」はどうなのか？

※イタリック表記は、実際の発言にはなかった部分